

卒業論文

大学教育における
アクティブラーニングの活用
に関する研究

Research on practical use of active learning
in university education

提出日 2014年1月29日水曜日

指導教授

斎藤正武 准教授

中央大学
商学部 金融学科

10C4164052C

松浦亮

大学教育におけるアクティブラーニングの活用に関する研究

中央大学 商学部 金融学科 斎藤正武ゼミ
松浦亮(10C4164052C)

近年、学生の授業に対する意識の低さが問題となっている。そんな中、学習効果を高める方法の一つの方法としてアクティブラーニング(能動的学習)が注目されてきている。一方で、E-learning は、日本国内で早い時期から CAI などが取り組まれていたが、当時は通信教育の新しい形という位置付けでした。2001年に e-Japan という国が打ち出した構想の中に教育分野での活用が含まれていたことから、国を挙げて本格的に利用されている。近年、インターネットをベースとした、親和性の高い IT 機器の融合により、様々な形態のアクティブラーニングが大学教育において行われている。

大学教育におけるアクティブラーニング活用の(特にフリップ授業のもと)現状と、中央大学における現状を述べる。そのような現状の中で、本研究は中規模の講義(情報システム設計論 I)を対象にして、フリップ授業をベースとした、アクティブラーニングを取り入れた講義を分析することで、大学教育におけるアクティブラーニングの実効性及び可能性について考察をするものである。具体的には、1)予習動画を学生に視聴させ、2)授業では演習(グループワーク)を行い、3)毎時間講義のリアクションペーパーを学生に配布し、4)最終講義にて講義やアクティブラーニングに対するアンケートを学生に配布した。上記の結果やアンケート、文献調査などから、アクティブラーニングを導入すべき講義とそうではない講義があることが分かった。そこで、中央大学商学部の授業(約 300)をいくつかの種類に分類し、マッピングを行うこととした。

結果として、本研究の実験で行った授業形態にはアクティブラーニングは適応することがわかった。学生のモチベーションの維持や学習に対しての意識は高められたと考える。しかし、アクティブラーニングを嫌う学生や、予習動画のシステム等、改良点、課題を残す結果となった。

今後の課題として、来年度の情報システム設計論でのシステムの改善、他の授業でのアクティブラーニング導入実験などにより、大学教育の質の向上が必要と考える。